6月24日開催

歴史講座「高瀬舟の歴史と役割」

６月２４日に、中央公民館で開催の歴史講座「高瀬舟の歴史と役割」に５０人が参加しました。
講師は歴史研究家の橋本惣司さん。県内に古くから存在し、津山の発展に寄与した高瀬舟の歴史や役割について資料や古写真を紹介しながらお話いただきました。

たくさんの資料や写真をもとに、分かりやすく解説いただきました。
高瀬舟は品物だけでなく、修学旅行にも利用されており、生徒６０人が乗った写真もありました！

【歴史】
川舟は弥生時代中頃に内陸水運の役割を果たしていたといわれている。
美咲町「月の輪古墳」（５世紀）からは舟形の埴輪が出土しており、吉井川と吉野川の合流地点にあるこの古墳は、豪族の墓であり、水運として高瀬舟に関わっていたと思われる。
高瀬舟の名前は、『日本三大実録』に「元慶８年（８８４）”大江、丹波両国が高瀬舟三艘を作る。そのうち一艘は、長さ３丈１尺、幅５尺である”と書かれており、平安時代初めには高瀬舟といわれていたことがわかる。

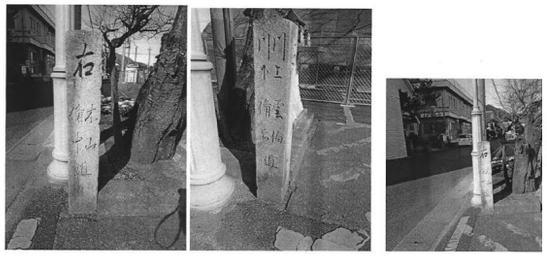
岡山県の高瀬舟の川湊地図

古くから中国山地の生産物を備前に運び、備前から生活用品を上流地域に運ぶ重要な役割を果たした。

岡山県の高瀬舟の川湊地図

【役割】
古代から中国山地の人や産物を瀬戸内、京大阪地域へ積み出す大量輸送機関として、また、京大阪や瀬戸内地域の生活用品や文化も中国山地へもたらした役割も果たした。
岡山県内の三大河川（吉井川、旭川、高梁川）と、その支流に運航した高瀬舟を支えた船頭や舟持たちのエネルギーは、特に遡行時と川さらえに発揮された。
そして、高瀬舟の役割の終焉は、明治になり高い文明の輸送機関である鉄道の敷設によって迎えることになった。

今も残る稲荷神社と道標。川上は雲伯道、川下は備前通と刻み、右は木山、備中道と刻まれている。船を降りた人への案内であった。



今も残る稲荷神社と道標

久世の船着き場

久世の船着き場—久世湊からは富6か村（314石余）大庭郡27か村（1664石余）を積み出している。

中川橋は明治8年に土橋が架けられた。それまでは舟渡であった。文化10年伊能忠敬は4銭の舟賃を払っている。

参加者は熱心に講演を聞き、質疑応答では多くの質問がありました。
「写真や地図などと共に貴重な話が聞けた」「むかしの交通事情がよくわかった」「とても興味深く聞き、現地へ行ってみたい」「高瀬舟について楽しく学ぶことができた」などの感想がありました。

寛政8年、津山楢村の兵六が生野代官所へ出した文書
これらの品々を金岡湊へ積下るので小桁・木知が原の舟番所を通してくださるよう裏判をしてくださるようお願いします。

寛政8年の文書